

講義ノートから

野田俊作*

* 神戸家庭裁判所医務室（当時）

要旨

キーワード：

初級講座や公開カウンセリングでとりあげた話題のなかから、まとまった論文にするほどでもないけれど、書いて残しておきたいことどもを集めて投稿しました。いずれも日常なにげなく『自明性のわな』にとらわれて見すごしがちのことです。アドラー心理学の臨床では、きちんとした理論にはまだなっていない、こういうやや雑学的なことが結構役に立ちます。なにかのときにご参考になれば幸いです。

1. しつけ

育児あるいは教育をめぐる人間関係にはふたつの種類があります。ひとつは、先生 **teacher** と生徒 **student** との関係、もうひとつは師匠 **master** と弟子 **disciple** との関係です。先生—生徒関係は、主に知識の伝達を目的とするもので、かならずしも人格的なふれあいを前提としません。一方、師匠—弟子関係は、人格的な成長を目的とするもので、知識の伝達は副次的なものです。アドラー的な用語を使うと、先生—生徒関係は社会（ゲゼルシャフト）的、師匠—弟子関係は共同体（ゲマインシャフト）的な関係と言えましょう。両者を比較すると、表1のようになります。

さて、しつけ **discipline** ということばは弟子 **disciple** ということばと関係があります。つまり、しつけとは「師匠と弟子の道」なのです。したがって、師匠—弟子関係のないところに、本当のしつけはありえません。今、この国でしつけがないのは、親子間であれ師弟間であれ、先生—生徒関係はあっても、師匠—弟子関係がないからです。さらには、その背景である、共同体的人間関係がないからです。

かつては、尊敬される人が人々に推されて教師になりました。今では、尊敬されたい人が教師になって、人々に尊敬を強要しています。尊敬されたいために教師という職業を選択することそれ自体が悪いことだとは言いません。どんな動機であれ、共同体に有益な職業を選択するのはよいことです。しかし、一旦教育者という職業を選択したかぎりは、いつまでも幼児的な『権力への意志』を追求しつづけるべきではありません。教師には、みずから人格的に成長しておとなとしてふるまうことで、生徒たちにおとなの問題解決行動のモデルを示す責任があると思います。「教師は労働者か聖職か」というような幼児的な議論ではなく、教育を可能ならしめる基礎としての、教師自身の人格的成長、すなわち共同体感覚の育成が、教育界の目下の急務ではな

先生—生徒関係	師匠—弟子関係
知識伝達が目的	人格的成長が目的
先生のことばを生徒がおぼえる	師匠の行動を弟子が見習う
社会的関係	共同体的関係
契約関係	信頼関係
普通は一時的関係	普通終生の関係
教える—習う	共に学び共に生きる
賞罰による訓練	勇気づけによる育成
仕事のタスク	交友ないし愛のタスク

表 1

いのでしょうか。

教師だけではありません。およそ人の子の親たるものは、すべからく我が子の師であるべきです。もっと正確に言うと、好むと好まざるとにかかわらず、我が子の師であるほかはないのです。師匠（親）の行動を弟子（子）は見習います。悪い師匠の弟子になるのは一生の不幸です。親たちの多くは、師匠としての資格がないままに弟子をとっています。すなわち、ほとんどの親は精神的にはまだ子どもなのに子を産んで育てているのです。子どもが子どもを育てていたのでは、おとなが育ててこないのはあたりまえです。親がまずおとなにならなければ、子どもはいつまでもおとなにはなれません。

心構え論としては以上に尽きますが、では実際にはどうすればよいのでしょうか。現在すでにある社会資源を利用するとすれば、ステップ^{〔註1〕}や親業^{〔註2〕}などは使えます。これらのコースは、しつけの技法を身につけさせることを目的として作られたもので、私が今ここで言っている、先生から師匠への成長、あるいは、共同体的な教育理念そのものを身につけさせようとするものではありません。しかし、これらのコースによってしつけの技法を学ぶことは、先生—生徒関係を脱却して師匠—弟子関係に入ってゆくためのひとつのきっかけになりえます。因習的なしつけ法にかわる、より共同体的なしつけ法を身につけることで、共同体的なものを見かたも育てゆく可能性があります。行動が変わればやがてライフスタイルも変わるものですから、それらのコースでしつけについての行動がまず変われば、しつけをめぐるライフスタイルも変わることがありえます。それらを小手先の技巧を教えるだけのものだと馬鹿にすることは当てはまりません。はっきりと意識して使われれば、それらは受講者の行動だけではなくライフスタイルをも変えるのです。

しかし、現状を見ますと、それらのコースの受講は、必要なことではあっても、それだけでは充分ではないように思います。育児・教育についてのちゃんとした考えかたなしにただ技法だけを身につけてしまう例がまま見うけられます。これでは本当のしつけはできません。ステップであれ親業であれ、誤用・悪用しようと思えばいくらでもできるのです。親や教師が子どもたちを支配し服従させるための道具としてそれらの知識を使う危険もないではありませんし、不幸にして、実際にそのような例を見聞きしたこともあります。技法の裏付けのない心構え論は、無力ではありますが、すくなくとも害はありません。一方、正しいものの見方に裏付けられていない技法は、それはそれとして有効であるだけに、危険でもあり、多くの場合、実際に有害ですらあり

ます。ステップや親業で身につけた技法は、正しいものの見かたに裏付けられてはじめて本当のしつけとして生かされうるのではないかと思います。

しつけの技法はあくまで、共同体的人間関係にもとづく本当の師弟関係・親子関係への道であること、道でしかないこと、をいつも忘れてはならないとおもいます。目標がはっきりと意識され、そこに至る道筋をはっきりと知っているとき、人間は間違わずに生きてゆけます。しつけの目標はいつでも、みんなが共におとなになることにあるのです。子どもたちをおとなにしようと思うならば、まずおとなたちが本当のおとなになるしかありません。

2. 信頼

信じるということには、信用 **belief** 信頼 **trust** 信仰 **faith** の3つの段階があります。

信用というのは、基本的には不信なのだが、信じてよい根拠があるときだけは信じる、という態度です。たとえば、私が銀行でお金を借りようとするときのことを考えてみましょう。銀行の貸付係は、基本的には私を信じてはいません。ただ私がなんらかの担保物件を示して返済能力があることを証明したときにだけ、かろうじて私を信じて、お金を貸してくれます。これが信用ということです。

信頼というのは、証拠があろうがなかろうが、相手は悪いことをするはずはない、あるいは、たとえ悪いことをしたとしても、いつかきっと改めてくれる、と信じてしまうことです。いわば、相手に白紙の小切手を渡してしまうことです。

信仰というのは、相手の人間をではなく、神などの超越的な存在の善意を信じることを介して相手を知ることで、相手の人間がなにをしようとも、たとえ自分にたいして害をしようとも、それは自分にはわからない神の意志によるのであって、それが神の意志であるかぎり悪いことであろうはずはないから、感謝して受けとろうとする態度です。

わかりやすいように、この3つを表にしておきます(表2)。

このうちで、アドラー心理学が治療者に要求するのは信頼です。治療的関係のなかでの信頼とは、クライアントが、今現在はいかに間違った行動をしていようとも、きっといつかわかってくれる、きっといつかは立ち直ってくれるという、楽観的な態度です。治療者の信頼はえてして裏切られます。そのときには許すことです。十回でも百回でも許すことです。もし裏切られたので腹を立てて、それからは信じられなくなるのなら、それは信頼ではなくて信用です。信頼というかぎりは、何度裏切られても信じつづけることです。

信用	信頼	信仰
社会的	共同体的	超越的
仕事のタスク	交友ないし愛のタスク	愛ないし宗教のタスク
基本的には不信	基本的に信	絶対的に信
証拠があれば信じる	証拠がないのに信じる	証拠がないので信じる
証拠物件を信じる	相手の人格を信じる	絶対者を信じる

表2

たとえ話をひとつ。嫉妬深い奥さんがいたとしましょう。いつも夫が浮気するのではないかと疑っていて、夫の帰りがすこしでも遅くなると「浮気していたでしょう」と攻めます。この夫がある日のこと、ある女性と浮気ができそうな情勢になったとします。夫は考えます。「もしこの人と浮気をして遅く帰ったら、女房は『浮気していたでしょう』と言うだろう。もし浮気しないで、ただ話だけして帰っても、やはり女房は『浮気していたでしょう』と言うだろう。とすれば浮気しなければ損だ」。そうして浮気をしてしまいます。帰ると、奥さんは予想どおり「浮気していたでしょう」とつめよります。夫はうんざりして、内心、「きっとまた浮気してやる」と決心するでしょう。

一方、まったく嫉妬しない奥さんがいたとしましょう。夫が少々遅く帰ろうが、寛容というか鈍感というか、「遅くまでお仕事大変ね。おつかれさま」というわけです。さて、この夫が、ある日のこと、ある女性と浮気できそうな情勢になったとします。夫は考えます。「女房は鈍感だから、浮気しても気がつかないだろう」。そうして浮気してしまっただとします。帰ると、奥さんは案の定、「こんなに遅くまでお仕事大変ね。おつかれさま」と言います。こういう奥さんをだましつづけるのはとてもむずかしいと思いませんか。人間であるかぎり、信頼してくれる人をいつまでもあざむきつづけることはできないと思いませんか。きっと夫はいつかはげしく後悔して、浮気しようなどとは考えなくなります。

こういう考えかたは甘いと思う人は、人間というものをよく知らないのです。神経症者であれ犯罪者であれ、一時的に治療者の信頼を裏切ることがあっても、それでもなお信頼しつづけてくれる治療者を裏切りつづけるようなことはしないものです。そのような人たちは信頼された体験が少ないので、はじめのうちは治療者を試そうとして、何度か治療者を裏切ることがあります。しかし、それでもなお治療者の信頼が動じなければ、そのような人たちは信頼された体験が少ないだけに、信頼されていることを知った時の感動も大きく、かならず信頼に答えてくれるように変わってゆくものです。

信仰はアドラー心理学の範囲ではありません。しかし、私のまったく個人的な感じとしては、人格的な神であるかどうかはともかくとして、なにか人間を超えた超越的な力の善意を信じないで、相手の人間を信頼しきることは、ときにむずかしいことがあります。逆に言うと、超越者の善意を信じることは、相手を信頼するためには便利な方法です。アドラーもドライカースも、特定宗教を信仰していたという意味においてではなくて、この宇宙そのものの究極的な善意を信じていたという意味で、信仰を持った人でした。相手を信頼しきるためには、あるいは、このような意味での信仰が必要なのかもしれません。親鸞聖人が「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と言いきれるのは、「弥陀の本願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり」というすさまじい信仰があったからでしょう。法然上人への人間的信頼もあったでしょうが。その背後に超越者への絶対的信仰があっただけで、その人間的信頼が絶対的なものになりえたのだと私には思えます。

3. 結婚

法律で縛られなければ夫婦でおれないというのは悲しいことです。

男と女とが愛しあって共に生きる決断をすることを結婚といいます。そうして共に生きてゆくことを結婚生活といい、そのような男女を夫婦といいます。つまり、本来、結婚とか夫婦とかいうのは、法律で縛られた社会的な行為ではなく、個人の決断にもとづく主体的かつ共同体的な行為であるはずなのです。

結婚が法律上の行為になったのは、いつごろからなのか正確には知りませんが、そう古いことではないと思います。日本では、高々江戸時代からではないでしょうか。いずれにせよ、現在では結婚は法的な行為であると考えられるのが普通になっています。ですから、届け出をしないで同棲するのは結婚とはみなされませんし、そういう生活をしている男女は夫婦とは呼ばれないのが普通です。また、一旦成立した結婚を解消して離婚するのも法的な手続きが必要で、ご存じのように、ときにこれは法外もなくやっかいなことになりえます。

もし、結婚に関する法的制約が一切なくなったとしたらどうなるのでしょうか。ひとことで言うと、婚姻関係が不安定になるでしょうね。重婚や浮気も増えるだろうし、離婚も増えるでしょう。そのためにさまざまな悲劇がおこるでしょう。現段階では、結婚に法律が介入することは、不可避の必要悪なのです。結婚は誰にでもできるが、結婚生活は誰にでもはできない。多くの人にとっては、法律に縛られないと結婚生活の継続がむずかしいのです。これは悲しいことです。

法律の規制がまったくなくなると、結婚の様式は、いくぶんとニホンザルの家族のようなものになるでしょう。ニホンザルの家族を観察しますと、一匹の雄のボスがいて、多くの雌を所有しています。ボス以外の雄たちは配偶者を持てませんが、たえずボスの妻である雌たちを誘惑しますし、雌のほうもボスの目を盗んで浮気するのにやぶさかではありません。ただ、排卵期の雌はけっして浮気しないのだそうです。この点はサルのほうがヒトよりも賢いですね。ともあれ、ヒトもサルの一種ですから、本来のありかたはこのようだったのでしょうか。実際、平安時代の貴族の生活などを見ると、だいたいこのようです。人間の本能にもとづく結婚生活のありかたは、たぶんこんなところですよ。このようなありかたを人類が捨てたのは、サルとヒトとの本能のシステムの違いによるのではなくて、法律であれ道徳であれ姻族からの圧力であれ、社会的な制約のためであるように思います。すなわち、現在の婚姻制度は、ヒトという種の本能的プログラムに根ざしているのではなくて、社会慣習であるように思うのです。ここに現在の婚姻制度の本質的な緊張があるようです。そこで、一夫一妻制を維持しようとするれば、たとえば法律の助けを借りなければならなくなるのです。

誤解をさけるために言っておきますが、私は本能的生活を礼賛するほどナイーブではありませんし、したがって、一夫多妻論者でもフリーセックス論者でもありません。法律の助けを借りないと夫婦生活を続けられないという程度にしか今の人類は成長していないということは悲しいことだと言っているだけです。法律などとは関係なく、ひとりの男とひとりの女とが一生愛しあって暮せるとしたら、それはすばらしいことです。法的に夫婦であるかどうかではなくて、精神的に夫婦であるかどうかこそが本質的なことであり、ずっと大切だと言っているのです。

もう一度、誤解をさけるために言っておきますが、私はフリーセックス論者ではないが、また、一夫一妻制にこだわっている道徳家でもありません。一夫一妻であろうが一夫多妻であろうが一妻多夫であろうが多夫多妻であろうが、共同体の見地からは、いずれが道徳的でいずれが不道徳であるというようなことはないと思います。たとえば多夫多妻で問題なく暮らしている家族があったとすれば、それはそれで結構なことだと思います。要は当人同士にとって互恵的であり、かつ共同体にたいして破壊的でなければいいのです。

なぜ一夫一妻制が道徳規範として強調されるようになったのか、本当のところは私にはわかりませんし、またそのことの探究は私の仕事ではありません。ただひとつ、私に言えることは、一夫一妻制の婚姻制度は人間の本能に根ざしたものではないかもしれないが、家族というものは人間の本能に根ざした生活様式であるということです。歴史学も人類学も家族生活を営まない人種の例を知りません。家族というものは動物の生活様式としては自明ではありません。高等動物でも家族を営まない種は多くあります。人間が普遍的に家族生活を営むということは、家族というものは制度ではなくて、人間の本能に根ざした生活様式であるということの証拠です。この点か

らは、家族のひとつのありかたとしての多夫多妻制は存在可能であるかもしれないが、家族が存在しないような形でのフリーセックス制は存在しえないと思います。

さて、ニホンザルの家族のことを説明するとき、ボスザルが多くの雌ザルを「所有」していると言いました。結婚生活が所有一被所有関係であるという事態はヒトでも同じです。かつての時代には男性が女性を所有していましたが、現在では相互に相手を所有しあっています。いくぶんかは改善されたとはいえ、なお所有一被所有関係であることには変りはありません。下卑た言いかたですが、性交渉があると、「あの女はもうおれのものになった」とか「あの人はもう私のものよ」とか言うことがありますね。口に出すか出さないかはともかくとして、性交渉を介しての所有一被所有の感覚は夫婦間に一般的に見られ、ほとんどの人はそれをおかしなことだとは思いません。だからこそ嫉妬というものがあろうるのです。でも、これは猛烈におかしなことです。性交渉があろうとなかろうと、人が人を所有するというのはおかしなことです。何人も他者を所有したり他者に所有されたりすることはできません。つまり、夫婦関係は所有一被所有関係ではありえないのです。夫婦関係が相互の所有関係だというのはひとつの文化的な自明性のわなです。合法的な奴隷制です。

愛のタスクが所有一被所有関係にすりかえられていることは現段階の人類の最大の悲惨のひとつです。結婚が本当に結婚であり、夫婦が本当に夫婦であり、家族が本当に家族であるためには、まず相手を所有したり相手に所有されたりという野蛮を脱却しなければならないと私は思います。ひとりひとりがこのことに気づき、所有とは関係のない人間関係を持てるまでに成長するときにはじめて、人は人を本当に愛せるようになるのです。愛のタスクは、ですから、目下はまだ宿題なのです。

4. 家族

愛のタスクは、多くの人にとっては、それが何であるかさえよくわかっていない問題だというのが現状のようです。それでもなお、人間は家族生活を営まねばなりません。そこでさまざまの家族内葛藤がおこってきて、おかげさまでわれわれの仕事がなくなるわけです。

古典的なアドラー心理学では、家族内の人間関係をすべてひっくるめて愛のタスクに分類します。しかし、よく考えると、家族内にも仕事のタスクや交友のタスクに分類したほうがよい課題もたくさんあります。つまり、家族内では、アドラーの言う3つのライフタスクのすべてが存在するのです。家族内の3つのライフタスクは分離して考えたほうが便利で、それを全部ひっくるめて愛のタスクだと言うと、ときに家族内の人間関係がこじれてしまうことがあります。たとえば、奥さんが掃除があまり好きではなくて、家の中がいつもちらかっていたとしましょう。ご主人はそのことが不満で、奥さんが掃除をしないのは愛情が足りないからだと考えたとしましょう。こんな考えかたをしますと、夫婦関係がこじれる元です。掃除というのは奥さんの仕事のタスクです。つまり、愛のタスクではなく、したがって、ご主人への愛情とは関係がないのです。そう割りきると、ご主人は奥さんの仕事ぶりに不満は持っても、愛情を疑うことはしなくてすむようになります。

治療上の便法にすぎないのかもしれませんが、家族の人間関係のなかにも仕事のタスクや交友のタスクで割り切れる部分を見いだして、そういう部分はそういうように扱うという方針をお勧めします。これは実はアドラー心理学の家族治療では普通にやっていることです。たとえば、家族契約などというのは、家族の人間関係のある部分を契約関係、すなわち仕事のタスク、に還元してしまおうとするものですし、家族会議というものもある程度そうです。「子どもは家族だとは

思わないで同居人だと思いなさい」と私はよく言いますが、これは親子関係を交友のタスクにしてしまおうとしているのです。

こういうクールなやりかたは、一見家族の尊厳を踏みにじるように感じられます。「本当に愛しあっている家族ならば、いちいち会議を開いたり契約したりしなくてもわかりあえるはずだ」という反論はまことにもっともです。ところがどっこい、実際にはそうはゆかないことも誰でも知っています。絵に描いた餅は餓を満たしてはくれません。逆に、ことばはすこし悪いですが、黒猫でも白猫でも、ねずみを取る猫は良い猫です。愛が聖域であることを認めるにやぶさかではありませんが、だからといって、家族の人間関係すべてが聖域であるとは思いません。愛でない部分、なかならず仕事のタスクに分類できる部分には積極的に介入してよいと思いますし、そうしたからといって、家族の尊厳を踏みにじることにはまったくならないと思います。

アドラー心理学は愛を軽視するのか。そうではありません。家族の人間関係のうちで、仕事のタスクや交友のタスクなどのように、比較的容易に扱える人間関係をとりだして、それはそれとして処理してしまいますと、あとに残るのは純粹の愛のタスクということになって、扱いやすくなるのです。もっと正確に言うと、治療者はクライアントの愛のタスクを扱えないと思うのです。他人同志の愛をいったいどう扱えと言うのですか。もっともっと正確に言うと、当事者すら自分たちの愛を扱うことはできないと思うのです。意図的に扱えるようなものならば、それは愛ではありません。治療者であれ当事者であれ、十全に扱えるのは仕事のタスクだけであって、交友のタスクになるとだいぶ怪しいと思います。家族の人間関係の、なるだけ多くの部分を仕事のタスクとして扱い、どうしても仕事のタスクとは分類出来ない部分だけを交友のタスクとして扱うというのが家族治療のコツでしょう。そうして家族内の人間関係が改善すれば、愛のタスクも副作用として改善されるのです。やや乱暴な言いかたですが、ディンクメイヤーは「愛情はうまくいっている人間関係の副産物」と言っています。感情としての愛情は、使用の心理学の立場からは当然そういうことになるでしょうね。ただ、愛情即愛ではないと私は思います。

このように考えてくると、アドラー心理学が好む、一見事務的な家族治療技法は、実は愛というものの重大さ、その取り扱いの困難さを知っているからであることがわかります。事務的に扱えるタスクをすべて愛から切り離して扱い解決してしまうと、そういったものに愛が汚されることがなくなると思うのです。人間は愛を扱うことはできませんが、愛でもないものを愛であると思誤解することをやめることはできます。家族の不幸の多くは、実は愛でないものを愛であると思ひこむところに由来しています。普通、人が愛と呼んでいるものの多くは、よく考えると所有であったり支配であったり依存であったり、本当の愛からはほど遠い幼児的な目標追求であるにすぎません。もし本当の愛に生きられるほどに人類が成長していなるとすれば、せめて愛でないものを愛であると呼ぶことをやめて、愛の美名に隠れてよからぬことをするのだけはやめましようよ。

[註1] ステップ：アメリカで開発されたアドラー心理学に基づく親子関係プログラム。本論文執筆当時には日本製のプログラムはまだなかった。

[註2] 親業：アメリカで開発されたロジャーズ心理学に基づく親子関係プログラム。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載